

「肉となれる神」

(ヨハネ1:14~18)

挽地茂男

2018.12.30 日本基督教団千歳丘教会

クリスマス礼拝・祝会ともに、神さまの祝福の内に終わりました。教会の暦では12月25日の「降誕日」から1月6日までを降誕節〔聖公会、ルーテル教会〕と呼び、1月6日を一応クリスマスシーズンの終わりと考えております〔実は、日本基督教団とRCでは受難節の始まる“灰の水曜日”までが降誕節〕。紀元3世紀頃までは東方の教会では1月6日にクリスマスが祝われておりましたが、4世紀に東西教会の合意に基づき、西方の教会が守っておりました12月25日を降誕日と決めました。その結果、従来東方教会



のクリスマスであった1月6日は「公現日」(顕現日)と名前を改め、主イエスが公に現れた日、八日目の割礼や、主イエスの洗礼などを記念



する日となりました。また西方の教会では幼子イエスへの東方の三博士の訪問と礼拝が記念の中心となり、異邦人に対する主の顕現として祝われるようになりました。しかしながら東方の教会では、例えば一部のロシア正教などでは、現在でも1月6日にクリスマスを祝うところがございます。

何はともあれ今日は2018年最後の礼拝です。礼拝では、アドベントの第1週から少しずつ小刻みに「ロゴス賛歌」(1:1-18)を学んでまいりました。「ロゴス賛歌」と言われても、はじめて耳にされる方もおられるかもしれません。繰り返し申し上げることになりますが、1章1-18節には「言」という単語がたくさん出てまいりまして、ギリシア語で「言」のことを「ロゴス」と言いますので、この箇所を通称「ロゴス賛歌」と呼んでおります。またこの「ロゴス賛歌」は、最近の研究では、当時、実際

に讃美歌として歌われていたと考えられております。カトリックのフランシスコ会訳聖書ではこの箇所を、

- ① 1 章 1 － 5 節を「賛歌 1 番」、
- ② 1 章 6 － 8 節に「洗礼者ヨハネの証し(1)」
- ③ 1 章 9 － 1 4 節を「賛歌 2 番」、
- ④ 1 章 1 5 節に「洗礼者ヨハネの証し(2)」
- ⑤ 1 章 1 6 － 1 8 節を「賛歌 3 番」とそれぞれに小見出しをつけて翻訳しております。「ロゴス賛歌」は、当時使われていた讃美歌に「洗礼者ヨハネの証し」を組み合わせ、全体として「賛歌」で「洗礼者ヨハネの証し」をはさみこんだ（ダブル・サンドイッチ状の／ダブル・チーズバーガーのような）構成になっています。

わたしたちはアドベントの第 1 週に、「初めに言があった」の「言」



「ロゴス」を、2 つの翻訳聖書（最古の日本語訳であるギュツラフ訳聖書および気仙語訳聖書）と、旧約の「箴言」、外典の「知恵の書」を参照しながら、神さまの「思い」と翻訳できる可能性を温ねました。「初めに神さまの思いがあった」（気仙語訳「初(はす)めに在ったのァ神様の思いだった」）。世界と人間と歴史が存在する前に、神さまの「思い」があった。先週はその神さまの「思い」を、1 4 節の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という所まで追いかけてみました。「言」を神さまの「思い」に直しますと、「神さまの思いは肉となって、わたしたちの間に宿られた」となります。イエス・キリストは神さまの「思い」そのものなのです。

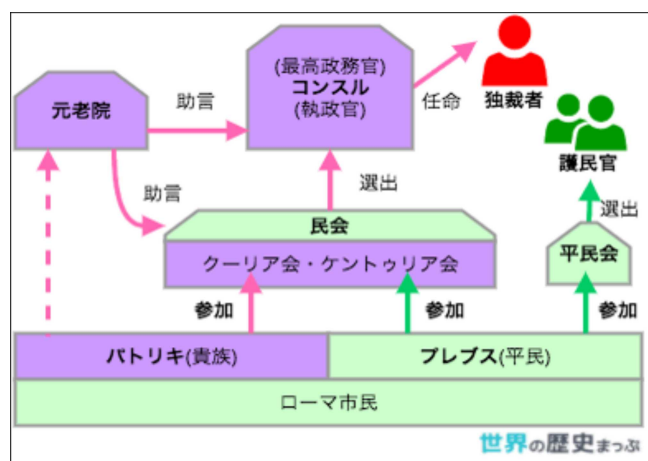
加えて先週は、その「思い」をより感覚的に理解するために、神さまの「思い」に善きサマリア人の「思い」を重ねたのでした。強盗に襲われて半死半生で道ばたに投げ出された旅人を見つけて——相手が自分たちを軽蔑するユダヤ人であるにもかかわらず——彼のもとに駆け寄り、助け介抱したサマリア人の「思い」と、主イエス

がこの世に下った「思い」とを重ねたのでした。神は人間を見捨てておけなかったのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3:16)。人生の旅人―旅の途上で時に痛手を負い前進不能となる旅人―であるわたしたちに、神は「思い」を寄せておられるのです。これがキリスト生誕に込められた神の「思い」だったのです。そしてこれがわたしたち人間の価値を測る唯一の正確な尺度なのです。わたしたちは「神が愛された世」つまり「神が愛された者」なのです。これ以外の尺度はありません。その人の能力も、経歴も、業績も、家柄も、絶対的なものではありません。しかし誰がなんと言おうと、人は神の愛する存在(対象)なのです。わたしたちが自分をどれほど愛せなくても、また愛さなくても、そうなのです。福音のメッセージは、すべてここから、この神さまの「思い」から始まるのです。

神さまの「思い」をここまでたどってくると、言が「肉となる」という考え方をさらに当時の環境

世界と対照させて、2つの側面からその「思い」を理解しておきたいと思います。

第1は、聖書に出てくるもう一つの「賛歌」を取り上げる必要があります。それは今年の1月に学びましたフィリピの信徒への手紙2章の「キリスト賛歌」です。キリストは神の身分を捨てて、人になった、とパウロは語ります。そしてこの賛歌を学んだときに、日本のキャリア官僚の出世コースを紹介して、古代ローマにも同じような出世コースがあったことを紹介しました。それは古代のラテン語で「クルスス・ホノールム」(cursus honorum)、「名誉のコース」「名誉のキャリア」と呼ばれていました。ローマ市民権を持っていれば、平民でも実力があればこのコースを上って行けたのです。代表的な官職名では、①護民官



民会で政務官(財務官、按察官、法務官、および執政官)を選出

プレブス

(tribunus plebis 平民を保護、平民会から選出。経験者は[終身の]元老院議員に)、②**財務官**(quaestor: 30歳以上、ローマまたは属州における財務責任者)、③**按察官**(aedilis: 36歳以上、公共建築の管理、祭儀の管理、市場の監督)、④**法務官**(praetor: 39歳以上で、財務官または按察官の経験者。法務および他の政治的責任)、⑤**執政官**(consul: 元老院で最上の職位。平民[プレブス]出身者は42歳、ローマ貴族[パトリキ]の出身者は40歳以上。市の政治上、軍事上の責任と重要な属領の統治の責任を負う)。

クルスス・ホノールム「名誉のキャリア」「名誉のコース」は、共和政ローマ期及び初期の帝政ローマ期の、政治的・社会的な野心を持ったローマ人(主にノビレス[新貴族]階級の者)が、最高の官位(である執政官^{コンスル}就任)に至るまでの取るべき進路を示します。ローマ市民にとって「名誉のコース」をたどって公職を務めることは、社会的名誉を達成することによって確認される、彼らの存在意義に関わることだったのです。また社会的名誉を追求するローマ社会に

おいて、右肩上がりで上昇していく「名誉のコース」という発想形態は、個々人から小集団や結社(collegia)などの地域組織まで広まっていたのです。パウロは、この発想法を背景にして「キリスト賛歌」を語っているのです。



初代皇帝アウグストゥス

オクタウィアヌス(後の皇帝アウグストゥス)は、実に巧みに共和制ローマ期の公職のキャリア・コースを駆け上がって行った人です。彼の養父でありましたシーザー(カエサル、Julius Caesar, c.100-44 BC)も巧みに共和制ローマ期の公職のキャリア・コースを駆け上がって行った人でして、彼の公職の職歴(経歴)が残っております。彼はまず財務官^{クァエストル}(紀元前69年、31歳)、按察官^{アエディリス}(紀元前65年、35歳)、そして法務官^{プラエトル}(紀元前63年、37歳)と公職を歴任し、紀元前59年(41歳)に、ついに最高位^{コンスル}の政務官である執政官に上り詰めます。右肩上がりにキャリアの



シーザー(カエサル)



ローマの元老院

階段を上っていったのです。

ローマの元老院は、この卓越した政治的指導者となったシーザー（カエサル）を「神」と呼びました。そして彼の養子となった後の初代ローマ皇帝アウグストゥスは、当然のように「神の子」と呼ばれたのです。この時代に「神の子」と言えば、まずはローマ皇帝を意味していたのです。この「神の子」と呼ばれたローマ皇帝アウグストゥスが人口調査の勅令を下した時代に、主イエスは、花の都ローマとは対照的な、ローマ帝国の辺境の地ユダヤのベツレヘムの馬小屋に生まれたのです。

フィリピ書の「キリスト賛歌」が語るキリストは、シーザー（カエサル）やアウグストゥスがたどった右肩上がりで上っていく名誉のコース（クルスス・ホノールム）とは反対の、逆のパターンをたどります。フィリピ書2章6－11節。

キリストは

① 神の身分（形 **μορφή**）でありながら（ὅς ἐν μορφῇ θεοῦ ὑπάρχων）

② 神と等しい者であることに固執しようとは思わず（οὐχ ἄρπαγμὸν ἡγήσατο τὸ εἶναι ἴσα θεῷ）キリストは上らずに降りてきます。

③ **かえって自分を無にして**（ἀλλὰ ἑαυτὸν ἐκένωσεν）

④ **僕の身分**（形 **μορφή**）になり（μορφὴν δούλου λαβών）

⑤ **人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ**（ἐν ὁμοιώματι ἀνθρώπων γενόμενος· καὶ σχήματι εὐρεθεὶς ὡς ἄνθρωπος）

⑥ **へりくだって**（ἐταπείνωσεν ἑαυτὸν）どんどん下がっていきます。

⑦ **死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした**（γενόμενος ὑπήκοος μέχρι θανάτου, θανάτου δὲ σταυροῦ）

右肩下がりの（下降的な）方向をとります。**キリストは名誉のコースとは逆のコースをたどるのです。**キリストの不名誉のコース（クルスス・プドールム *cursus pudorum*）と言っていいでしょうか。そしてヨハネによる福音書は、キリストは「**自分の民のところへ来たが、**

民は受け入れなかった」(1:11)

と語るのです。当然かもしれません。誰が社会の敗残者を受け



エル・グレコ「福音書記者ヨハネ」

入れるでしょうか。しかし人類の救いにとって、敗残者にしか見えない一つの生涯が必要だったのです。神は**キリストのたどった下りのコースの生涯をよしとした**、とフィリピ書は語ります。2章9－11節。
2:9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。2:10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、2:11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

第2は、ヨハネやパウロを含む当時のキリスト教を取り巻いていたヘレニズム（汎ギリシア）文化〔アレクサンドロス大王の遠征によって生み出された、ギリシア文化の汎化と土着文化との融合〕の思想的な側

面です。この思想は、肉体と靈魂とを分けて考える、いわゆる「靈肉二元論」と呼ばれる考え方です。「健全な精神は健全な身体に宿る」とわたしたちでも言うように、精神と身体、心と体、靈魂と肉体を分けて考えることはそれほど珍しいことではありません。

しかしギリシアの思想や宗教の中には、かなり徹底した「靈肉二元論」がでてまいりまして、まるで肉体を悪の根源、罪の源泉のように考える思想や宗教も少なくありません。この思想では、肉体が否定的なもの、劣位にあるものとしてとらえられます。それゆえ多くの宗教が、靈魂の肉体からの解放という形で宗教の究極目標(救い)を語ります。肉体をもって生きるということは、生やさしいことではありません。肉体は疲れ、衰え、傷み、病み、朽ちていくの



です。そして、わたしたちは肉体を持つ限り、いくら善を行おうとしても、また清く生きようといくら決心を繰り返しても、ずるずると後戻りしてしまうのです。「肉体は魂の牢獄である」と言ったのは、かのプラトンでした(『パイドン』82E)。パウロも「肉の人に死んで、霊の人に生まれ変わる」「古い人に死んで、新しい人に生まれ変わる」と申しました。パウロも肉の呪縛に苦しんだのです。肉からの解放として救いが求められました。

一つ例をご紹介します。古代ギリシアのオルフェウス教という宗教で出てくる「霊肉二元論」に基づいた神話です。ギリシア神話は抽象概念を分かりやすく説明するために使われることがよくあります。この神話もそうです。その神話は「ザグレウス神話」といいます。〔ギリシアの神話は、1つの神話がいくつかのヴァージョンに枝分かれし、よく似た話でも細部に違いが出てくる場合がありますが〕この神話の概要はこうです。

ギリシアのオリュンポスの主神(最高神)ゼウスは自分の妻、神のお妃であった(神妃)ヘーラーの

実の母レアーと交わり、娘ペルセポネーが生まれます。〔なかなかおどろおどろしいのですが、お許しください。〕ペルセポネーが成長して、その美しさに周囲が目を見張るようになりますと、ゼウスはついに、自分の思いを抑えておくことが出来ず、蛇に化けて(化身して)ペルセポネーに近づき、思いを遂げてしまいます。ペルセポネーは身ごもり、子を産みます。悲劇の神の子ザグレウスの誕生です〔ザグレウスは単にデーメーテールとの間に産まれた子という神話系統もある〕。ゼウスは我が子——孫でもあります——ザグレウスに世界の支配を



イシス・ペルセポネー像

託すつもりでいたのですが、ところが、ゼウスの妻神妃ヘーラーが嫉妬の炎を燃やします。嫉妬に狂ったヘーラーはザグレウスを亡き者にしようと図ります。ヘーラーはティタン(族)(地底の神・悪魔)〔ティタンは英語読みでタイタン、巨人を意味します〕を唆かし、ザ



グレウスを襲わせます。ザグレウスはティタンの手を逃れて、数々の動物に変身して抵抗しますがついには——牛になったとき——捕らえられてティタンに食われてしまいます。食べ始めたところに、もう一人の神アテナ〔アテネの守り神〕が通りかかり、一大事とばかりに割って入り、体の一部をむんずとつかんで取り返しますが、ザグレウスはティタンに八つ裂きにされ食われてしまいます。一方アテナは、奪い返した体の一部——心臓——をもってゼウスに事態を告げます。アテナの報を受けたゼウスは怒り立ってティタンを雷火で撃って焼き殺します。雷火に焼かれて山のように残ったそのティタンの灰の中から、やがて人間が生まれてきたのです。

つまりこの神話は、人間が2つの要素から成っている、と言おうとしているのです。つまり1つは

ティタンの要素、悪魔的、魔的な要素。どんな善良な人間にも潜んでいる、魔的な要素です。もう1つはザグレウスの要素、神の子の要素です。このティタンはザグレウスを食べてしまったがゆえに、ふつうのティタンとは違う、ザグレウスと結びついたティタンなのです。オルフェウス教の神話では、ティタンの要素を肉体、ザグレウスの要素を靈魂(魂)と読み替えます。わたしたちの靈魂(魂)はティタンにとらえられた、神の子ザグレウスのように、肉体の中で神の世界を憧れて、清き世界に行こうとしてもがいている、と説明されるのです。この人間理解に基づいてオルフェウス教の祭儀が営まれます。

オルフェウス教の「霊肉二元論」は神話として説明されるとかなり強烈なイメージを与えますが、「霊肉二元論」自体は当時の世界では一般的な考え方だったのです。肉体に対するこのような考え方を背景に置くと、「神が肉体をとる」という思想は、当時の通念からすれば、むしろ躓きでありナンセンスだったのです。神があえて劣った肉体をとるなどということは、

考えられないことなのです。しかしパウロは、キリストが



肉体をとったからこそ、人間の罪が取り除かれ、救いが実現したとして、こう言います。ローマの信徒への手紙 8 章 2 - 4 節。

² キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。³ 肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、**罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。**⁴ それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、〔結果として〕律法の要求が満たされるためでした。

十字架に表わされた真理は、常識の目にはまるで見えません。その価値も意義も理解できません。愚かにしか見えないのです。パウロが言うとおりです。しかし信仰の経験と事実は、十字架の持つ力と価値と意義とを明らかに示すのです。コリントの信徒への手紙一

1 章 18 - 25 節。

1:18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。1:19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」1:20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。1:21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、

お考えになったのです。1:22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、1:23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、1:24 ユダヤ人であろうがギリシア人



であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

神はキリストのたどった下りコースの生涯をよしとされました。朽ち果てるべき肉体をとることをよしとされました。御子が「罪深い肉と同じ姿」で世に下ることをよしとされたのです。ここに愛があるのです。

ヨハネの手紙一 4章 9－12節。

4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるように



なるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。

4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。4:11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。4:12 いまだかつて神

を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。

「名誉のコース」クルスス・ホノールムを上っていくことを望み、達成のために努力することが常識の社会では、キリストの生涯はまったくナンセンスな生涯です。靈魂(魂)が優位にあり、肉体が劣位にあることを常識とする世界では、キリストの生涯は躓きです。しかし神は、その生涯によって達成されるべきものを知っておられたのです。キリストは名誉の階段を上り詰めて王となり、彼にぬかずく僕たちを勝ち得たではありません。王になったと言うならば、彼は僕になることによって、王となったのです。そして彼が即位し着座した十字架は、無惨な出来事であるにもかかわらず人々を引き寄せ、十字架の物語は人々に救いと慰めを与えたてきたのです。「神さまの思い」は十字架をその視野の中に収めていたのです。それは愛が可能にする視野なのです。キリストは「善きサマリヤ人の譬え」が示すように人々の

隣人として生き、人々のためにその生涯を使い尽くすことによって、兄弟愛の国の王となったのです。マルコによる福音書は、主イエスの言葉をこう伝えています。

10章45節。「**人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金（贖いの代価）として自分の命を献げるために来たのである。**」

主イエスを通してなされた御業を憶えつつ、2018年の残りの日々を、また新しい1週間を歩み出しましょう。

2018.12.30 日本基督教団千歳丘教会



1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

1:15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

1:16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

1:17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

1:18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

1·1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1·2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

1·3 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἓν. ὃ γέγονεν

1·4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων·

1·5 καὶ τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει, καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν.

1·6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος παρὰ θεοῦ, ὄνομα αὐτῷ Ἰωάννης·

1·7 οὗτος ἦλθεν εἰς μαρτυρίαν, ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν δι' αὐτοῦ.

1·8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός.

1·9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ φωτίζει πάντα ἄνθρωπον, ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον.

1·10 ἐν τῷ κόσμῳ ἦν, καὶ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ᾔγνω.

1·11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οἱ ἴδιοι αὐτὸν οὐ παρέλαβον.

1·12 ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ,

1·13 οἱ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

1·14 Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

1·15 Ἰωάννης μαρτυρεῖ περὶ αὐτοῦ καὶ κέκραγεν λέγων, Οὗτος ἦν ὃν εἶπον, Ὁ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἔμπροσθέν μου γέγονεν, ὅτι πρῶτός μου ἦν.

1·16 ὅτι ἐκ τοῦ πληρώματος αὐτοῦ ἡμεῖς πάντες ἐλάβομεν καὶ χάριν ἀντὶ χάριτος·

1·17 ὅτι ὁ νόμος διὰ Μωϋσέως ἐδόθη, ἡ χάρις καὶ ἡ ἀλήθεια διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐγένετο.

1·18 θεὸν οὐδεὶς ἑώρακεν πώποτε· μονογενὴς θεὸς ὁ ὢν εἰς τὸν κόλπον τοῦ πατρὸς ἐκεῖνος ἐξηγήσατο.